

子どもの未来のために心がけたい 「ポジティブトーク」の環境づくり

「三つ子の魂百まで」という諺（ことわざ）があるように、
幼少期の習慣や環境は子どもの人格形成に
大きな影響を与えます。なかでも、親がかかる
「言葉」によって、子どもの行動・思考パターンは
良い方向にも、悪い方向にも左右されます。

日本ハグ協会会長
高木さと子さん

誰にもできる簡単なコミュニケーション「ハグ」とコミュニケーションを合わせた「ハグニケーション」を提唱。企業、団体、家庭に向けてさまざまな講演活動やイベントを取り組んでいる。自身も15歳と13歳の男の子のママ。



子どもが大人になり、仕事や恋愛、人間関係での悩みと向き合うようになった時、その人が取る行動パターンや考え方は、当然のことですが、親からの影響を最も大きく受けています。そして、その行動・思考パターンは、変えようと思っても、なかなか変えられるものではありません。

一般的に、おらかな育てられ方をした子どもは、細かいことを気にしないポジティブな性格になるとされ、「〇〇ちゃんはすごいね」「何でもできる子だね」と言われて育てられた子どもは、チャレンジ精神の旺盛な人になることが多いと言われています。反対に「周りの子に比べて〇〇ちゃんはダメな子ね」や、「どうしてこんなこともできないの」と言われ続けると、その言葉が子どもにとってのセルフイメージとなり、子どもは「自分は良い子ではないのだ」というイメージから逃れにくくなってしまいます。



3歳を迎える頃になると、子どもはボキャブラリーは足りなくても、その言葉の意味を理解し始めます。だからこそ、日常の会話や子どもにかける言葉には、十分に気をつけなければい

けません。例えば、「〇〇ちゃん、ありがとう？ ちゃんとお礼を言いなさい」と親が子どもに強いるのではなく、ママが普段から「ありがとう」、「きょうも楽しいね」、「うれしいなあ」という言葉を使うことで、子どもにも自然と肯定的な思考がインプットされていくものです。子どもの人格形成は日常の習慣によるものが非常に大きいため、親の行動や言葉が子どもの未来をつくっている」という意識を常に持って、子どもと接していきたいものですね。